

学びのR

No. 5 (平成29年9月)
埼玉県教育局南部教育事務所
<https://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/g2201/index.html>

「R」は「reform (改革)」の頭文字です

*** 「思考ツール」で授業改善 ② *** ～思考の可視化で学びを深める～

* 前回の①「ピラミッドチャート」に続いて、「マンダラチャート」(小学校6年生での実践例)を紹介します。マンダラは、3×3のマトリクスを使った発想法です。中央のマスに課題を記入したところから発想を広げていきます。自由に発想させる方法もありますが、論理的に進めていくようにすることにも活用できます。

思考ツールを活用した授業実践事例 ② マンダラチャート



小学校 第6学年 国語

「言葉を選んで、短歌をつくろう」
『たのしみは』

本時のねらい

自分の「たのしみ」を題材にして短歌をつくる。

思考ツール活用の意図

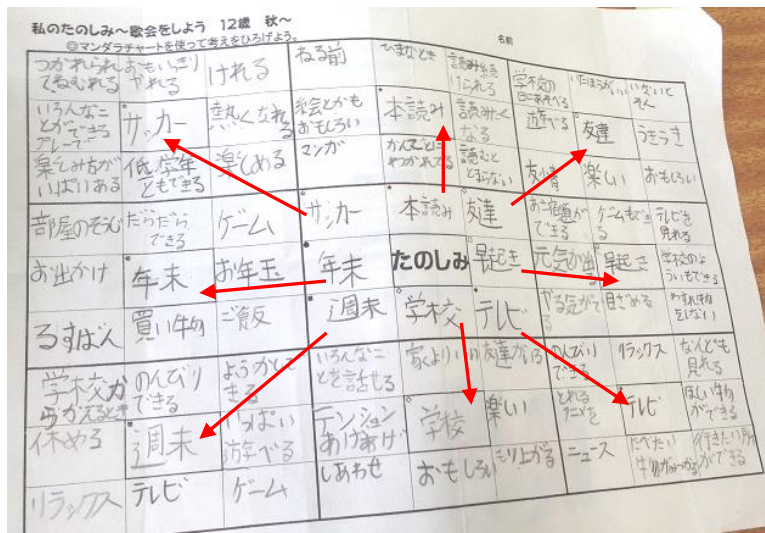
多くの児童にとって短歌をつくる初めての経験となるため、なかなかつくれなかったり、最初に思い浮かんだ言葉だけでつくろうとしたりする児童が出てくることが予想される。そこで、児童からたくさんの言葉を引き出し、言葉の選択肢を増やした状態で短歌をつくることできるように、マンダラチャートを活用する。

具体的な活用方法

- ① 中心に「たのしみ」と書く。
- ② 「たのしみ」という言葉から連想したことを周りの8つの枠に書き込む。
- ③ さらに、この8つの言葉から連想したことを8つずつ書き出す。
- ④ 連想して書き出した72の言葉をもとに短歌をつくる。

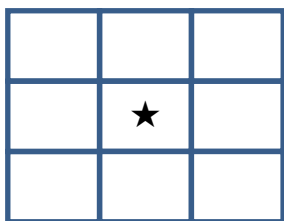
思考ツール活用の成果

多くの言葉を書き出したことで、各児童の「たのしみ」が具体化された。これらの言葉をもとに、短歌をつくるにあたり、言葉のもつイメージについて話し合ったり、代わりの言葉を探したりする活動につながられる。また、困難を感じている児童には、始まりや結びの言葉を決めて、書き出した言葉を補うように指導することができる。



【マンダラチャート】

拡散・具体化



中心に考えたいことを記入し、周辺のマスに考えたいことから連想した言葉を書き込む。子供のアイデアを拡散させたいときに用いることで、柔軟な思考を生む。また、抽象的な概念を具体化させることもできる。

💡 他教科等での活用のヒント

<外国語>

スピーチ原稿づくりなどの、まとまりのある文章を書く際などに活用できる。中心に主題となる言葉を入れて、イメージを広げる。記入は英語、日本語どちらでもよいが、

- ・日本語であれば短時間でできる。
- ・英語であれば、原稿づくりの材料や、即興で発表する時のメモとして活用できる。

ねらいを踏まえて、表現する活動の前段階で、効率よく扱いたい。



上記の授業実践は、マンダラチャートの使い方の1つの例です。同じ思考ツールでも使い方は様々あります。学習のねらいに応じて、「どの思考ツールを使うか」、「どのような使い方をするか」工夫してみましょう。



「学びのR」はこちらからも御覧いただけます!



話し合いの手立て

Ⅱ ディベート



「ディベート (debate)」は、特定の論題について、定められた規則に従い、肯定・否定の組に分かれて行う討議で、判定は議論を聞いていた第三者によって行われます。課題を深くとらえたり、論理的思考を育成したり、議論の技術を高めたりするための一つの方法で、授業への導入も考えられます。

【留意点】

- 肯定側・否定側のチームを3～5名程度で編成する。
※原則として個人的な考えでのチーム編成はしない。
- 議論については、資料やデータに基づく根拠をもった発言をするようにする。
- 勝ち負けにこだわるあまり、相手に失礼な言動が行われるなど、目的に反する状況を招かないように、適切な事前の指導や準備を行う。
- ディベートの進行（時間配分等）については、目的や参加者の状況に応じて工夫する。
※複数回実施し、役割を交代することで、全員が参加する機会がもてるようにする。
- 審判員や聴衆も、意見や考えをまとめ、発表する機会をもてるようにする。
※それぞれの意見や考えを聞くことで、多面的・多角的な見方や考え方を育成することが重要になる。

【実践例】

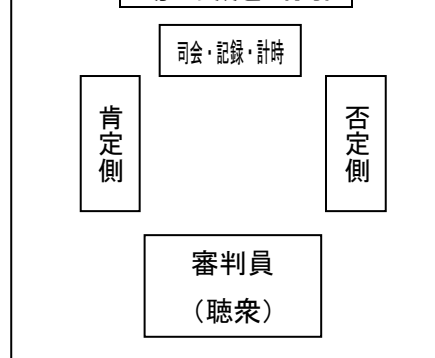
- 小学校
 - 「学級文庫にまんがを置いてよい」（国語）
 - 「新聞かインターネットでニュースを読むなら、新聞がよい」（国語）
 - 「北海道か沖縄に住むなら、沖縄がよい」（社会）
- 中学校
 - 「日本は動物園を廃止すべきである」（国語）
 - 「優先席をなくすべきである」（国語）
 - 「日本は死刑制度を廃止すべきである」（社会）
 - 「江戸時代の鎖国政策は正しい選択であった」（社会）

※ディベートの論題は、「価値論題」「政策論題」「事実論題」等に分けられます。判定は、議論の有効性（根拠、説得力等）により判断するようにします。

ディベートの流れ（例）

【肯定側】	【否定側】
①立論 3分	②質問 2分
④質問 2分	③立論 3分
準備時間（作戦タイム）3分	
⑥反論 2分	⑤反論 2分
⑧最終弁論	⑦最終弁論
⑨判 定	
⑩講 評	

場の設定（例）



* 授業力向上ミニ講座 *

単元等のまとまりを見通した学びの実現

授業改善に関して、『小（中）学校学習指導要領解説・総則編』（77ページ）には次のように記述されています。

「主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通して、例えば、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくり出すために、児童（生徒）が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった観点で授業改善を進めることが重要となる。」

すなわち、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を考えることは、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で指導内容をどのように構成するかというデザインを考えることに他ならないのです。

各学校においては、単元や題材のまとまりの中で、指導内容のつながりを意識しながら重点化を図るために、効果的な単元の開発や課題の設定に関して研究を進めていくことが重要となります。

授業の中で、児童生徒がリトルティーチャー（スモールティーチャー・ミニ先生等）となって、相互に教え合う活動を取り入れている実践が増えていきます。教えられる側の理解が進むだけでなく、教える側の思考が再構築されることで、より確かな学力の育成に効果があるようです。

最近では、学力向上に向けた小中連携の一環として、中学生が小学生の学習を支援する活動を実践している例も見られます。教師が、どのようなことができるとよいのかを明確にし、子供たちの活動につなげることが大切です。